

村野次郎創刊

香 蘭



2020年(令和2年)5月号

第 97 卷

第 5 号

通卷 1073 号

二〇二〇年(令和二年)五月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第五号

村野次郎作品 私の愛誦歌（57）

新聞を読みふけりゐて火にあぶる

スルメ忽ち縮まるにあわつ

『村野次郎歌集』

『村野次郎三百首』を読んでいて、この歌に出会った時「おつ」と立ち止まった。それまで泰然自若であった村野先生が慌てておられる。まるで4コマ漫画を見るようなこの歌に、思わずクスリとした。写真に見る温厚な面立ちの先生にも、こんななつかしい場面があったのだと親しみを覚えた。

火鉢の傍らで新聞を読みふける先生は、和服をお召しになっていたのではなからうか。炭火に乗せたスルメがぐるりと丸まり、慌てておられる姿にユ一モアを覚える。

炙り上がった熱々のスルメを細く裂き、私の父は酒の肴にしていた。お酒を召し上がらない先生は、スルメを噛みながらまた新聞を読み続けられたのだろう。

火鉢の火の温もりと、部屋に溢れるスルメの匂いが甦り、先生の人間味に触れたような愉しい一首である。

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』160頁、『村野次郎三百首』80頁に所収）



香 蘭

2020年(令和2年)5月号
第97巻 第5号 通巻1073号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(57)		岩田明美	表二
	作品一特選	石井・伊藤(康)・西野・本田・大井田		
	作品二、三特選(三月号)	阿部・岩田・白井・江口・岡野・金子(幸)・高田		2
	西・牧田・武藤・小笹・河野・田端・渡邊			4
	作 品			6
	一			25
	二			34
	三			42
	推薦香蘭集			43
	香 蘭 集			22
	村野次郎への旅(122)	千々和久		24
	歌の生まれる場所(88)	中村かよ子		27
	七首抄(三月号)	阿部・水谷・馬場		47
	私の読む現代短歌(1)「山中智恵子の宇宙」	田中あさひ		52
	エッセイ・自由研究「古事記に見る歌謡の役割 その二」	近藤純		54
	焦点(三月号)「暮らしの手触りを」	桜井京子		56
	作品一特選欄評(三月号)	香山静子		58
	作 品 評(三月号)	香山三枝子		60
	作品一	丸山富貴美		62
	作品二	岡野甫江		64
	作品三	小笹岐美子		66
	香蘭集	坪・中野・館ヶ沢・関(哲)		68
	緑 地 帯	関口静子		72
	明宝研究会第一一六回二月例会	山田あさひ		78
	文法あれこれ(12)	山下道正		80
	他誌拝見 113	長野子		81
	他誌拝見 特別篇			82
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向			88
	令和二年香蘭短歌会 新年歌会記			93
	歌会及び会合・会員消息・他			96
	編集後記・新宿日記			表三
	表紙絵	中村 陽子「重なり合って」		和雄
	目次・緑地帯カット			

四 選 者 の 作 品

ど真ん中 平塚 千々和 久 幸

譲り合い遠慮しあつてど真ん中破られしことしばしばなりきど真ん中に割り込んでくる者多し 後半生も飛べというにかレストランも教室も端から埋まるからど真ん中が空くこともあるど真ん中が正解だとは限らない下手な鉄砲は真ん中狙う窓ぎわより新型コロナに大揺れの街の表情を見て学習す

どうでもいい風評ばかり コロナコロナで躓き転び二月の逝けり叱られて反省をして飲むなどは酒徒の作法にあるまじきこと屁の突つ張りにもならぬ歌詠み四月過ぐ誕生日まで十一ヶ月

冬の干潟 東京 桜井京子

時折は誤作動おこしてしまふわれ電源おとし暫くもたり
こんなにも遠く来る気はなかつたが冬の干潟はみづ鳥ばかり
残り少なになれば逆立ちだつてするマヨネーズなり冷蔵庫にて
若いねと言はれた時点で負けてゐる年齢だけが人生なれば
天と地がひつくり返つて日が暮れてとまれ湯船に手足をのぼす
いくたびか裏切られてはただよへる浮雲だつたかビル街のうへ

部屋から部屋へわが連れてゆくヒーターが小さく唸るうす埃して
この年も違はず真冬にやつてくる六十五回目のけふ誕生日
過 熱 横浜 渡 辺 礼比子

焼香の順はいかにと話しおり永遠に眠れる人のかたえに
感染症研究者として励みたる叔母さん呆けてヘルパー泣かす
我が子とも可愛がられし甥姪の九人参じて野辺の送りす
もう勘弁してくれよとぞ蛸足の電源タップ過熱せりける
米軍基地前派出所に立つ美丈夫の巡査 謀叛を思う日なきや
生協の配達員より賜物のごとく受け取るマスクひと箱
ブドウ球菌捕集にもよきマスクらし とにかく買えればなんでもよろし

（湯を飲んでウィルス予防を）のライン来てすぐにお詫びが来る デマでした
黒いマスク 鎌倉 香山 静子

やうやくに白木蓮のひとつ咲き今年も春が訪れました
些かのためらひあれど水溜まり思ひ切つて跳ぶ あ、跳べました
長々と生きたくないと嘯けど咳すれば即病院へゆく
うらうらと春の日の照る参道を黒いマスクの一団が来る
マスクする私とマスクしない人すれ違ひしが何事もなし
マスク買ふと老いも若きも春日照る古都鎌倉に行列をなす
春の海まばゆきひと日新型の肺炎避けて家に籠もりぬ
頂きし小さくまるき和菓子手にひと日家に籠るほかなし

作品一特選



(五選者共選)

相棒 習志野 石井雅子

「相棒」のテレビみてゐる紛れもなく相棒だった夫を亡くして好きな酒で死ぬは本望とわが言へば夫は嫌だと言下に言ひぬ

「死んでまたあの世の鬼と」と戦い人斬り以蔵になるや夫は子の言ふは大器晩成その母は佳人薄命と言ひて世になし

八畳ほどの編集室で先生は私語は慎めと言ふ時のありいつも会ふ夫と寡黙な青年が今日はならんで夕陽みてゐる

マヨネーズ逆立ちさせて喜ぶは負けず嫌いな京子先生
コロナショック 東京 伊藤康子

幼子の並べしごととき救急車の十数台が客船の辺に

オーストラリアの山火事はどうなったニュースを見つつ母のつぶやく
家族待つ国に帰るはいつならん客船のクルーは働き続けて

うつさるるもうつすもありぬ仏壇のおりん鳴らして出勤をする

子育て中さえこんなにも真剣に手洗いたしたことなかつたけれど
特別の有給あるらし休校の子や孫の世話する欠勤ならば

散歩道に満開の梅を見つけてはマスクはずして深呼吸する

木遣歌 東京 西野美智代

さくらより菜の花向くか 移りたる介護施設に夫は笑はず

ワルターの「田園」のCD病室にながす浅知恵夫に届くか

浅草のアンジェラスにて珈琲をのみむと洩らす 籠りて二年

祝宴に披露の筈の木遣歌 子の手を握り歌ひし夫よ

そんなにも謝らないで訪ふ度にわれはだんだん悪人になる

昨日のは義清さんのデコボンでこれ恵さんと言ひて食べさす

あなたより出でし単語を吟味する「暴行罪」の被告われかも

武漢 漢 長崎 本田 民子

武漢発コロナウイルスわが街のランタン祭りがちよつと寂しい

三峡を下りて武漢に着きし日のいちめんの蓮田とれんこん饅頭

武漢とはレンコンの町と覚えたりわが目裏の蓮蓮蓮田

諸葛孔明の日和見の館に生き活きと太極拳の人ら舞いおり

初雪をいまだ見ぬまま立春に秋より咲きつくぐ黄のオキザリス

二階の窓一つだけ開け夫とまく「鬼は外」へとつましい声で

八十年生ききてタクシー運転手にのど館二個を今日はもらいぬ

歳末前後

川崎 大井田 啓子

日暮れより寒気くるらし大晦日の空に風船ひとつ漂ふ
ずつと前見失ひたる錠剤をほがらに吸ひ込む 掃除機汝は
動かざる掃除機に言ひ分あるならむ叩いて寝かせて転がしてみろ
干し物を終へて仰げば中天の白雲遠く去りてをりたり

鉢植ゑの山茶花の向き変へるのも正月準備のひとつ 冬晴れ
収集を終へたるゴミ収集車かど曲るとき手を振りくれつ
スーパリーのガラス戸越しの丸時計開店まではあと五分なり

「記憶力」

川越 満木 好美

老人を追い越しきたるが踏切にて追いつかれたり夕暮れの町
掘りたての声に惹かれてゆつさゆさと葉つき大根かかえて帰る
スーパリーに売っているガム「記憶力」その名に釣られ一つ買いたり
藁にでも紐にでも縫るスーパリーに買うロツテのガム「記憶力」
池の面にうつる青空きりわけて鴨が一行に渡りてゆけり
杉の木のでっぺんに立つ白鷺をみな仰ぎ見て通りゆくなり
暖かきひと日のありてキッチンにかいわれ大根ざわざわと伸ぶ

落ちそうで

横浜 長野 道子

友の弾く三線の音は三日月を満月にかえる響きもつなり
そば打ちに渾身の力使いきり三人分の胃袋満たす
〈恋心〉の名札を下げしバラの枝につばみの多し冬のバラ園

バラの名は〈熱情〉されば葉の落ちて赤き二輪が一月の枝に
モーツァルト『不協和音』を聴きながら血の滲むまで歯磨きをせる
チエロを弾く男の眼鏡の落ちそうで聞くよりも見る今宵のバッハは
あちこちに傷みの見えて二十三年過ぎしわが家の青春終る

日本危うし

東京 坪裕

新型のコロナウイルス大陸に感染始まり日本危うし
遣唐使が帰還するなら許すけど新型ウイルスごめんこうむる
町ひとつ丸ごと乗客のせしままプリンセス号は闇をさ迷う
容赦なく新型ウイルス蔓延しやがて人類滅びてゆかん
人類の滅亡した後犬猫はどうして生きてゆくのだろうか
二合では少したりないあと一本寒い今宵は熱爛にする
いつの世も手を伸ばしてもとどかないところのありて背中が痒い

秘密ばかり

鎌倉 関口 静子

またひとつ思ひ出捨てる子供らと牛乳パックで作りし踏台
頭垂れ新宿ラインに寝入る人スマホだけは決して離さず
わが町にトランクルームのまた増えて秘密ばかりに囲まれてある
指の間の水掻きまでも洗ひなさい手洗ひ指導にテレビの言へり
水仙がみな向く方に目をやればいつのまにやら梅二輪咲く
ブラインドの透き間より見える冬晴れの山の形をつなぎ合はせる
人力車に研修中の張り紙のありて軽やかに走りゆきたり

作品二、三特選



(三月号作品から)

渡辺 礼比子 選

〈作品二〉

秋風の町

藤沢 阿部 容子

秋の日のふるさと祭りに爺ちゃんがポインセチアの鉢お買い上げ
車椅子を押す男性の母ならん手を叩きゆく秋風の町

手をつなぎ保育の児らが散歩する四頭身の体ゆらして

川沿いに海産物売る店がしらすを広げ海風当てる

・軽やかな囁目詠。一首目はくだけた物言いで人間味溢れる歌。

弟

安来 岩田 明美

父母の十三回忌に集ひたる弟たちに吾は今も姉

わが実家継ぎてくれたる弟の家族八人みな大きな眼

箆筋より父母の真心取り出だし嫁入り衣装を解いてゐます

丁寧な和裁の技を惜しみつつ引き抜く絹糸未だ強かる

・事物を介して血族に寄せる情愛を描く。

小さな棘

長野 白井 紀代子

あかんべをする相手などそなたより居るわけもなし落葉ふりつむ

洋梨のつるりと咽を通るとき小さな棘のすべり落ちゆく

ひっそりと昼を籠りてひと日暮る一時あずかりの荷物のようになぜ月を仰ぐのだろ月明けの月に気付きてうれしアルプス上空

・三首目、下句の比喩の意外性によって、独創的な歌となった。

娘と仰ぐ

柏 江口 絹代

どうしていると聞くことのほか何ができよう夫を亡くして黙する友に
秋空の青く光れる良き日なり寺のもみじを娘と仰ぐ

おかあさん、マッサージにどうぞと子の妻が手渡しくれし二万円札ぞ

・日々の哀歎を詠みながら、軽やかでおしつけがましさがない。

包丁くもる

尾道 岡野 甫江

船霊もうつらうつらとしてゐるか光のどけき小春日の波止
小形でも寒の魚は脂のり刺身に引けば包丁くもる

食用菜ノラボウナとふ種もらふ漢字に書けば野良坊菜なり

舌に湿して二円の切手貼りつぎて師走の愁をポストに落とす

・生活の中から詩を拾い、情感豊かに詠む。

三溪園

横浜 金子 幸子

爪立ちて肩越しに見る白鷺は水面をみつめすつくと立てり
岸辺より遠くはなれし白鷺の影ながながと水面にゆれる

置物のごとき白鷺一瞬に水面を蹴つて青にとけゆく

・孤高の白鷺に作者自らの内面が透けて見えるようだ。

合言葉

鎌倉 高田 みちあ

エプロンで信号渡ればその前にコンビニのドアはいつも待ちある

居眠りの椅子からずり落ち眼が覚める「転ぶな危険」は野にもある
「あ、忘れた」を合言葉にし近頃は互ひを咎めず追ひつめず居る
・ウィットによって、マイナスの感情をプラスに転化した。

黄金時代

横 浜 西 文 枝

「防災訓練」簡易トイレを組み立てて土のうを運ぶ真剣である
「しま茜」求めて夫は種子島へ近所の酒屋で見たとは言わず
七十代は黄金時代と誰か言うメッキなれども輝いてみん

・一歩引いた場所から見えてくる（おかしさ）を詠む。

浮 力

藤 沢 牧 田 明 子

荷台のみの貨車もこと引かれゆく家並とぎるる湘南の原
夏休みの宿題に描く貨物列車向かふ東京はとほくありにき
夕ぐれの浜辺に鴉のつつきある菓子の袋は浮力をもてり
縞馬の仔の死を撮りあるカメラマンと居間に映像を観てゐるわれと
宰相の唇くちがぐにやつと動きたび憲法改正とび出しさうで

・童画的な詩情溢れる一首目、下句で意表をついた五首目がいい。

蕎麦 つゆ

東 京 武 藤 昭 彦

粹などに関わりのなきわが一世 蕎麦つゆたつぷりつけて食べたし
タラップをJALファーストの法被着て降りてきた日のザ・ビートルズよ
おい利子よ俺の視力を越えてゆけたったの0・3ではないか
空たかく「赤勝て白勝て」吸われゆく源氏と平家は今も戦う
・自嘲と見せて、実は誇り高い荒魂の歌。

〈作品三〉

最後の満月

鎌 倉 小 笹 岐美子

ヨガマット敷くにもいろいろありましてバサリ置く人ソロリ置く人
新米のナースに採血される時「深呼吸して」と声かけてやる
イルミネーションの為にすっかり葉を刈られ昼の街路樹寒そうである
・切れ味鋭く詠む。三首目は風刺の効いた時事詠。

冬 鷗 鳥

鎌 倉 河 野 慎 二

少年史 小鳥吞みたる蛇の身をガラスの破片で裂く夏休み
煙草のむほかに用なき冬の日の煙は指しぬ風のゆくへを
飛び交はす朝のみぎはの紙切れとまがふかるさの冬鷗鳥
・アンニュイな詩情漂う一連。

パリの灯

東 京 田 端 明

白帝は石露つゆを崖にも咲かして来む黄冬を出迎へむとす
膚かわひどく荒れて路傍の桜の木けふまで何にいたぶられたる
冬羽をまといひて雪にまぎれゆかむわが身ひとつの出奔の朝
はつはるの空そらよざりゆくわが一機 翼よくよあれがパリの灯だ
・どの作品にも作者独自のこだわりと美意識がのぞく。

厄日の朝

鎌 倉 渡 邊 典 子

櫻黄葉ふきとどまらぬ山寺の石段くだる夕日に向きて
聖堂の奥より仄かな灯の見えて聖夜の歩道に夕闇が垂る
あららら卓上は味噌汁の海 老老われらの厄日の朝は
秋惜しむけふの茶に添ふる菓子の銘の（奥山）なれば鳴く鹿もあれ
・軽妙な三首目も技巧的な四首目もそれぞれに読者を楽しませる。

村野次郎への旅（122）

「ザムボア」と次郎（十四）

千々和久 幸

「ザムボア」（朱欒）第四巻第五號は、大正七（1918）年五月五日に發行された。定價、編輯兼發行者、發行所、表紙、カット（裏繪）は前月号と変わりはない。本誌は41頁で広告が4頁。

作品欄に顧問である北原白秋の作品のないのは白秋の意志だが、肝腎の村野次郎の作品がないのには拍子抜けがした。実質的な編集は河野愼吾、村野次郎が担っていた筈で、時折村野作品が見えないのは不思議であつた。

果せるかな、巻末の編輯餘録に愼吾名でこんな記述がある。原文のまま引く。

五月號は遅刊して諸君に申譯がない。これは編輯者の村野と僕に責任はあるが、二人とも止むを得ない事情のために、心ならずも四五日遅れて仕舞つた。村野は丁度六月が試験なので、その準備のために殆んど編輯の方は

手傳つて貰はれなかつた。多忙の中をやつと前月號歌評だけをお願いした。従つて詠草の取捨添削から雑務まで、僕が一人でやらなければならなくなつたので、目の廻る程多忙を極めた。

然し愈々一人でやらなければならぬと覺悟をすると案外氣力の働きが膨大して、比較的仕事が順調に運んで居つた。處が編輯にかかつた翌日から齒痛で一晩ぢう夜の目も眠らずに苦しんだ。

手記はこのあとも延々と続き、その涙ぐましく弁明に不謹慎ながら遂に嘔き出してしまつた。悪戦苦闘の経緯と言訳は、編集者なら思い当たる節もあろう。それにしても村野先生の学生としての律儀さ―試験に対する律儀さといふべきか、そして冷靜さはこの時代からのものであつた。愼吾の齒痛はなお治ま

らず、手術で抜歯し、その結果睡眠不足のため脳に故障を起こして高熱を發し、四日間食欲が無くすっかり衰弱したとある。

笑いごとではない、こうなると歌誌の編集は命がけである。今日の目でこのような編集体制を論うことは易しかろうが、それはわたしの意圖するところではない。時代がどう変わろうと、経験主義的徒弟制度の色濃い編集の内実と編集者の実情がお解り頂ければそれですむ。

さて五月号の出詠者には河野愼吾（巻頭に七首）、荒木暢夫、酒井廣治、穂積茅愁、笹井嘉一、深野庫之介、泉甲二、池上秋石、柿谷伸等の名前が見える。

愼吾の編輯餘録にあつた通り、村野先生は引き続き愼吾と合評形式の「四月號歌評」を執筆されている。

次いで「ザムボア」の六月号は、大正七（1918）年六月九日に出た。誌面の構成は5月号と変わらず、本誌が43頁のほか広告に4頁が当てられている。

ただこの号には、歌壇史的にもよく知られた白秋の「別れの言葉」が巻頭に掲げられているので、原文のまま左記する。

別れの言葉

北原白秋

諸君。

私は會での紫煙草舎解散の趣旨を愈貫徹せむが爲めに愈茲に諸君と袂を別つ。

私は幾度か斷行せむと欲して、諸君の阻むところとなつた。私の愛はそれをも振り拂ふにはあまりに深く、而も第二次草舎の基礎もあまりに薄弱であつた。

これが爲めに私は顧問の名の下に精神的に草舎の對世間的的位置及び舍風を支持し、更に諸君全體の團結の爲めに假りの中心者となつた。然し、それはもともと私の本意では無い。私は詩人である。宗匠では無い。私は私の詩を以て敢て天下万人の靈たらむ事を希求する。而も一小局限界に住して徒に師弟の道を行ふ事を耻づる。

私は高く離脱する。私は一人だ。私は寂しい。然し私の行くところには必ず足跡をのこす、私の詩をのこし、私の聲をのこす。直接に私は諸君の手こそ取らないが、諸君は更に呼吸を自由にして、私の呼吸に觸れ得る。私の聲をまた髓所に聴き惚れ得る。私は決して諸君の道を阻まない。私は去る。

現在私は諸君の誰もの歌をも自ら親しく觀

てゐるわけでは無い。ただ名義のみの顧問であり、而も全責任は却つて私の双肩に擔はなければならぬ苦しさにある。少くとも「愛」なき限り、如此は無意義である。却て事實上於て諸君の獨立心を薄くし、意氣を弱め自己本來の力と成長を害はしめるに過ぎない。

私が心強く茲に諸君を振り離す理由は一に諸君自らをして眞に考へしめ眞に力あらしめ眞に光あらしめむが爲めである。愛より更に深い慈悲、ああ、ただその爲めである。

苦しめ、あらゆる苦しみに自ら堪へよ。各自らその苦しむところに光れ。草は自ら地に生ひ、蟲は自らの殻を脱ぐ。立て、諸君は最早や自ら立つに充分である。草舎の基礎も既に自ら立つべく強固になつた。私の去るべきは今である。私は去る。

更に私の諸君と別る理由の二は短歌そのものに就いての私の疑義である。否、私は短歌の別途に出でんと欲するからである。短歌は古い。尊い。けれどもその形式は既に古い。短歌を短歌として尊重する者は眞に古きに還る。

短歌は畢竟するに万葉に還元す可きである。

私は識る。識つて深く景仰する。いささかも之を傷くるに忍びないのである。

私は短歌を尊重するが故に、短歌を短歌として一方に景仰すると同時に、私は、新代の詩人たる私は更にその別途に出る。

而も徒に短歌を現代語のそれたらしめむとするは識らざるの甚だしきものである。

私は短歌の形式以前に全然別個の現代語の一新短詩の創造に向つて進む。既に四年前私は此の爲めに眞珠抄の短唱を作つた。なほ私の此意見に就ては國詩募集に際して昨冬の東京日日新聞及今春の朱樂誌上に於て既に発表した苦である。

この現代語の一短詩の創造は眞に困難を極むべき畢世の一大事業である。不肖私如きが果して此の光榮ある効績を挙げる得らるか如何、思うと眞に空恐ろしい氣がする。然し進むで私は犠牲者になる。

現今の私としては手馴れた短歌に執するは却て易い。然し乍ら一大發願の前に古い未練と因習とを斷ちきる事は覺悟である。茲に於て私は歌壇より去り此草舎からも去つて了ふのである。(後略) 以下次号。